

---

---

## 意図的語彙学習としてのペアリングの問題点と可能性 ——否定接頭辞付形容詞とその肯定語 49組の提案——

内田 富男

---

### 1. はじめに

「雨が降りそうだ」という状況を英文で表現すると、辞書用例（『新和英中辞典』研究社）では a) *It is likely to rain heavily from Kanto through into the Tohoku districts.*（関東から東北にかけて大雨の見込み）という文例に見られるように likely to rain という句が使われる。一方、その反意を表す「雨は降りそうもない」の場合、b) *It is unlikely to rain.*（前掲、研究社）があり、unlikely to rain という句が使われている。また、英文の信頼性は不確かだが、ウェブ上は、c) *It is not likely to rain.* d) *It isn't likely to rain.* という文例も観察でき、ここでは、not likely to rain と n't likely to rain という表現が使われている。但し、1億語規模の現代英語コーパスとして広く知られる British National Corpus (BNC) を見ると、上記 b) unlikely to rain という用法は話し言葉と書き言葉のいずれにおいても一般性は低い。

上記 a) likely to rain の反意表現を、b) unlikely to rain、c) not likely to rain、d) n't likely to rain とする論理を単純化すると、likely ⇔ unlikely/not [n't] likely となり、これを語彙レベルに限定し、一般化すると、 $W_1$  (likely) ⇔  $W_2$  (unlikely) という図式になる。

このように肯定語と反意語をペアで提示する方法は辞書ではしばしば用いられる。しかし、発信語彙の学習方略としては反意語を同時に学ぶ  $W_1$  ⇔  $W_2$  式ペアリングの方法は問題点もある。Nation (2001) の分類では「反意語には meaning-based (*hot/cold*) と word form-based (*healthy/unhealthy*)」(p.54) の2種類があるが、後者は発信語彙として指導する際には注意が必要である。ある語とその反意語を同時に教えることは学習者が語義を理解する際に混乱を招く（例 Stahl & Nagy 2006, p.64; Schmitt 2010, p.36）。反意語とは、「基体の否定または反転を」（西川 2013）、すなわち「ある言葉（肯定語）に対し、反対の意味を持つ」（富井 2014）が、それぞれの語の詳細な意味や用法等の細かい特徴は異なる場合がある（López Jiménez 2010, p.158）ため、語のあらゆる語彙情報に関して、 $W_1$  ⇔  $W_2$  の関係性が成り立つということではない。にもかかわらず学習者は単純化・一般化して理解する方略を取りがちである。

語彙学習の方法には、意図的学習と偶発的学習がある。意図的学習としては、辞書の利用、語彙リスト・接辞のリストの利用や単語カードを用いる方法、カタカナ語の活用、コアミーニングを用いる方法、接辞を利用する方法などがある (Nation 2001, p307-369; Nation 2008, p110-111; 相澤2014, p152; 堀田・平野2014 p156-159)。これらが語彙の拡張を目的とする明示的学習方法で受信語彙の学習方略としては、このような意図的学習は推奨されるべき方法であろう。

しかし、意図的な「語彙指導」の方法として反意語とそのペアを同時に提示し、接辞のルールを教え込むような  $[W_1 \Leftrightarrow W_2]$  方式の指導の有効性は疑問である。本稿では、この図式に基づく指導の問題点に注目し、否定接辞、とりわけ形容詞の接頭辞に注目して、その形式的特徴、出現頻度、親密度について調査する。また、その結果を踏まえて、意図的語彙学習・指導の観点から英語教育語彙表における否定接頭辞を含む形容詞項目とそのペアの語について検討し、教育的示唆として肯定語とその反意語（否定語）のペアリング学習の具体案を提案する。

## 2. 先行研究

### 2.1 学習・指導項目としての形容詞

英語の形容詞及びその習得に関する L2 研究の例は極めて少ない。そこで筆者は英語教育語彙表における形容詞の扱い (内田 2014a)、及び日本人英語学習者の形容詞の習得状況 (内田 2016) について調査した。

以下は、内田 (2014a) の調査結果の一部で、教育語彙表における形容詞の位置付けについて後述する CEFR-JWordlist (投野2013) の品詞構成をまとめたものである。研究結果を略述すると、リストにおける形容詞の項目数 (1,494) は、動詞の項目数 (1,349) を100以上上回っており、主要4品詞 (7,059) の内、第2位の項目数で (図1-1)、そのうち A レベルの項目数は約400 (A1=148, A2=243) となっている (図1-2)。

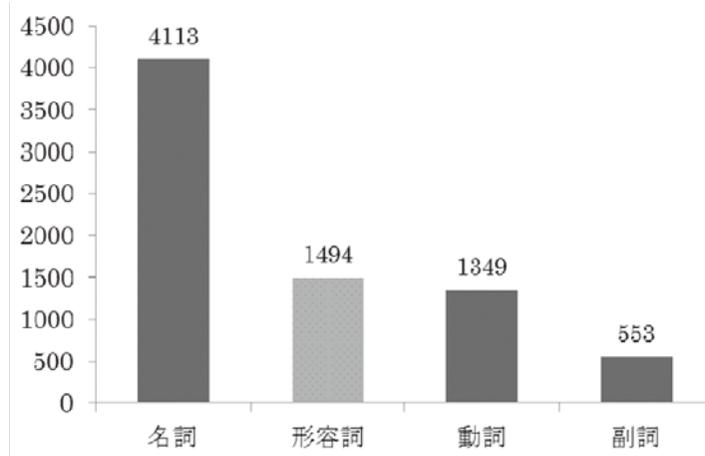


図 1-1 主要品詞の構成

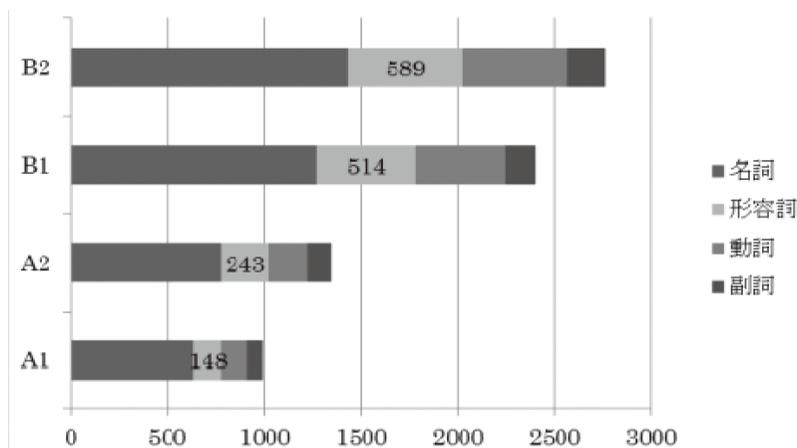


図 1-2 レベル別主要品詞の構成

上記の研究から、形容詞は、特に中級から学習目標の項目数が急増し、教育語彙として中級以上の学習者にとって主要学習課題である、と結論づけられた。また、内田 (2014a, 2014b) は、日本人中高生の英作文コーパスである *JEFLL (Japanese EFL Learner) Corpus* (投野 2007) と日本人大学生等の英語コーパスである *The International Corpus Network of Asian Learners of English* (石川 2014) の内、英作文のサブコーパス (ICNALE-Written) を使って、日本人の中学・高校生、大学生の英語学習者の形容詞使用の実態を調査した。これらの一連の研究結果 (内田 2014a, 2014b, 2016) から、日本人英語学習者の形容詞使用は極めて限定的で、形容詞の習得状況は極めて貧弱であり、教育目標と習得の実態の大きな差は顕著で、理想と現実の乖離が明らかになった。そして、語彙の習得、学習指導におけるひとつの課題として形容詞の指導内容と方法の検討の必要性が示唆された。

## 2.2 接辞研究と語彙習得、学習・指導

言語学における形態論 (morphology) を構成する語形成 (word-formation) の研究における主要テーマである接辞 (affix) に関する論考は多い。英語学に限っても接辞を主題とする言語学論文や形態論に関する著書の章を接辞 (学) が構成するケースは少なくない。但し、英文書籍には affix を書名に含む例もあるが、邦語文献では書名に「接辞」を含む例は極めて稀である。学術論文等は多くあるものの接辞を主題とする和書の例は、筆者の知る限り、西川 (2006, 2014) を除いて他書は見当たらない。西川 (2006) は、英語接辞について実証主義の立場から包括的に接辞項目を収集し、解説を加えている。その中で本稿と関連が最も深い箇所は「形容詞形成語尾」として以下の接尾辞 36 項目<sup>1)</sup> を収集している点である。

また、Plag (2003) は否定接頭辞 8 項目 (a-, anti-, de, dis-, in-, mis-, non-, un-) を挙げ、それぞれについて解説している (pp.9-101)。Bauer and Nation (1993) では、次の 4 つの評価基準に基づいて接辞のレベルを設定している。頻度 (接辞が生起する単語数)、規則性 (接辞が付いた結果、語幹か接辞がどのくらい書き言葉または話し

言葉の形式を変化させるのか)、産出性(新しい単語を形成するために用いられる接辞の可能性)及び予測可能性(接辞の異なる意味の頻度数と相対度数)。

これらの文献は、いずれも言語学(英語学)の視点からの接辞研究である。接辞の習得研究の例を見ると、日本人英語学習者を対象とした研究には Schmitt & Meara (1997) がある。彼(女)らは、接辞(但し、接辞付動詞)の受容的知識の習得度合いを語彙テストの方法を用いて調査し、日本人学習者は接辞知識の習得度は低い、と結論づけている。また、Mochizuki & Aizawa (2000) では、接頭辞と接尾辞の項目ごとの理解度と語彙サイズの関係調べ、接辞の習得順位を検証している。Nation (2001) では、接辞習得に関する幾つかの先行研究が紹介されているが、いずれも接辞の理解度調査であり、産出度調査ではない。また、Nation (2001) では、先行研究に触れながら語彙学習方略における意図的学習としての接辞の利用や接辞研究について多くの紙幅を割いて広範に述べている。例えば、接辞の学習上の価値、英語語彙の語源、接辞付き単語の割合や頻度、学習者の接辞の認知・知識、接辞のテスト、方略等である。その中で、学習者のための5段階の接辞リストを提示しており、「リストは教え方と学習のための順序が、学習努力に対して最善の結果を与えるものである」と述べている。5段階の接辞リスト (Table 8.4. ,p313) の内、stage1 と stage2 のみを以下に転載すると、接辞リストには動詞形成、名詞形成、形容詞形成、副詞形成の接辞が混在している。ここで形容詞を形成する接辞に注目すると、7項目 (-able, -ish, -less, -ly, -ness, -th, -y, **non-**, **un-**) が Stage 1 に、4項目 (-al, -ful, -ous, in-) が Stage 2 にリストされている。この内、否定接辞は、以下に太字で示した **non-**, **un-**, **in-**, **-less** の4項目のみで、否定接頭辞は3項目である。なお、否定接頭辞の内、**in-** のみが stage2 となっている。

Stage 1: -able, -er, -ish, **-less**, -ly, -ness, -th, -y, **non-**, **un-**

Stage 2: -al, -ation, -ess, -ful, -ism, -ist, -ity, -ize, -ment, -ous, **in-**

### 3. 研究方法

本研究では、現代英語の実相、日本における英語教育の枠組み、学習者の英語語彙習得という3つの視点から、次の(1)から(3)のデータ等を用いて否定接頭辞付形容詞とその肯定語について検証する。

#### (1) コーパスデータ: British National Corpus (BNC)

現代英語<sup>2)</sup>を代表するサンプルとしてBNCのデータを使用する。BNCは、最も広く知られる現代英語のコーパスで約1億語規模の電子コーパスである。その詳細については日本語マニュアルとも言えるガイ・アシュトン ルー・バーナード著(北村裕監訳)(2003)『British National Corpus The BNC Handook コーパス言語学への誘い』に詳しい。

それによると、1億語の内、約90%が書き言葉、10%が話し言葉で構成されている。

BNCには、これらの電子テキストデータ、コンピュータソフトウェアを用いて検索するために、全ての語に品詞標識が明示的に付与されている。本研究では、形容

詞の品詞標識が付与された語を形容詞として認定する。なお、形容詞一覧はBNCデータに基づく Leech et al. (2001) の The frequency list を、個々の形容詞の頻度の詳細は、BNCweb world edition を利用し、調査する。

(2) 英語教育語彙表：CEFR-J Wordlist

CEFR-J(投野 2013) は、外国語教育の枠組みの一例である「欧州共通言語参照枠」(Common European Framework for references, CEFR) に準拠している。「日本の英語教育での利用を目的に構築された英語能力の到達度指標」である CEFR-J には、英語の CEFR の教育語彙表 (English Vocabulary Profile) の日本版とも言える CEFR-J Wordlist (以下、J-Wordlist と略記する) が開発されている。このリストでは語には CEFR レベルが付与されており A1 から B2 の4段階で語彙レベルが示されている。A1、A2 レベルの語彙は発信語彙として最低限身につけたい語彙である、と言われる。

本研究では、同リストにおける A1 から B2 の語彙、形容詞項目や形容詞項目 (否定接頭辞付) とその肯定語のレベルの対応、頻度順位、頻度差等について調査する。

(3) 英単語親密度調査

日本人英語学習者の語彙習得データの代表的な大規模サンプルとして横川博一 (2009) 付属 CD-ROM のデータベースを使用し、「英単語親密度調査 (音声編)」の結果を活用する<sup>3)</sup>。親密度は英単語 (約 3000 語) と学習者の心理的距離を表す、とされる。同調査における刺激語の選択に当たっては、BNC の頻度等を参考にしており、上記 (3) との相性も良いと考えられる。

## 4 結果

### 4.1 J-Wordlist の否定接頭辞付形容詞項目

J-Wordlist には 1494 項目の形容詞がリストされ、レベル別に見ると A レベルが 400 弱、B レベルが 1000 強である。1494 項目の内、否定接頭辞が付く形容詞は 132 項目である。その内訳は、un-(78) i-(40) dis-(7) a-(5) non-(2) で、un が 59% (78) を占めている (図3)<sup>4)</sup>。

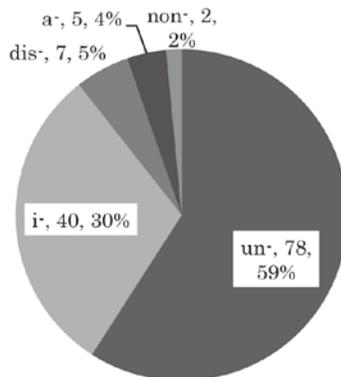


図3 否定接頭辞付形容詞の構成率

## 4.2 頻度とペア

否定接頭辞付形容詞のペアについてBNCにおける頻度を比較し、その差をまとめた(表1)。まず、J-Wordlistにおいてリストされるペアに見られる肯定語の頻度トップはdifferentである。一方、否定語のトップはunableである。否定接辞語の頻度上位トップ10は、unable (6134), unlikely (5557), unknown (4266), unusual (4017), disabled (3094), inadequate(2283), unexpected(2017), uncertain(1951), unfair (1899), unhappy (1866)でほとんどがun-である。例外はdisabledとinadequateの2件でそれぞれdis-, in-のトップとなる。

次に、頻度差に注目しよう。最も頻度差が大きいペアは、indifferent (595), とdifferent (47521)のペアで、46926と極めて大きい。頻度差第2、3位のunimportant (397)とimportant (38679)は頻度差は38282と非常に大きく、unavailable (377)、available(26990)のペアも頻度差26613と同様に大きくなっている。なお、able (29657)はunable (6134)とdisable (3094)とペアになる。いずれも頻度差が大きい。そうした例は他の項目には見られない。一方で、unavailable (377)やunimportant (397)のように否定語が極めて低頻度であるために頻度差が大きくなっているケースもある。

否定語と肯定語の頻度が逆転するペアが2組のみある。unfortunate (1551)|fortunate(1263)の差は288で、unknown(4266)|known(1951)はさらに大きく2315である。否定語であるunknownの方が肯定語のknownよりも高頻度であることは面白い。なお、unexpected (2017)、expected(2099)も頻度差は82と極めて差が小さいケースもある。

表1 ペアにおける項目の頻度差

否定語	粗頻度	肯定語	粗頻度	差
indifferent	595	different	47,521	46,926
unimportant	397	important	38,679	38,282
unavailable	377	available	26,990	26,613
disabled	3,094	able	29,657	26,563
unable	6,134	able	29,657	23,523
unsure	597	sure	23,276	22,679
unclear	943	clear	23,348	22,405
uncertain	1,951	certain	21,766	19,815
uneasy	923	easy	19,293	18,370
uncommon	660	common	18,969	18,309
unlikely	5,557	likely	22,502	16,945
unnecessary	1,814	necessary	17,847	16,033
unnatural	462	natural	13,937	13,475
abnormal	801	normal	12,174	11,373
unhappy	1,866	happy	12,487	10,621
unsuccessful	953	successful	10,691	9,738
unpopular	638	popular	10,361	9,723
unaware	1,133	aware	10,464	9,331
indirect	1,581	direct	10,303	8,722
unsafe	389	safe	7,534	7,145
unofficial	609	official	7,480	6,871
unfair	1,899	fair	8,495	6,596

unlimited	706	limited	6,345	5,639
unsuitable	690	suitable	6,011	5,321
unreasonable	978	reasonable	6,065	5,087
misleading	1,253	leading	6,065	4,812
unfamiliar	788	familiar	5,517	4,729
unattractive	328	attractive	5,047	4,719
unwell	222	well	3,999	3,777
unhealthy	277	healthy	3,953	3,676
unlucky	511	lucky	4,031	3,520
unusual	4,017	usual	7,328	3,311
unhelpful	248	helpful	3,114	2,866
unfit	364	fit	3,205	2,841
unwilling	964	willing	3,793	2,829
dissatisfied	449	satisfied	2,998	2,549
uncomfortable	1,327	comfortable	3,841	2,514
dishonest	350	honest	2,852	2,502
inaccurate	457	accurate	2,886	2,429
unacceptable	1,219	acceptable	3,608	2,389
unconscious	1,131	conscious	2,976	1,845
unreliable	476	reliable	2,201	1,725
inconvenient	300	convenient	1,967	1,667
unsatisfactory	760	satisfactory	2,160	1,400
unrealistic	577	realistic	1,849	1,272
unkind	267	kind	1,517	1,250
inadequate	2,283	adequate	3,530	1,247
improbable	377	probable	1,182	805
unexpected	2,017	expected	2,099	82
unfortunate	1,551	fortunate	1,263	-288
unknown	4,266	known	1,951	-2,315

### 4.3 レベルとペア

J-Wordlistにおいて肯定語と否定語それぞれのレベルに注目すると、レベル差があるペアと同一レベル内の語のペアがある。それは次のパターンはまとめることができる。レベル差のないペアは、A2A2(5組),B1B1(3組),B2B2(3組)の組み合わせがあり、A1動詞のペアはない。レベル差があるパターンは5パターンあり、最多の組み合わせはB2A2ペア(11組)であり、B2B1ペア(9組)、A2A1ペア(5組)、B2A1ペア(3組)、B1A1ペア(2組)、となる。また、否定語が肯定語より低レベルの項目になっているペア(dishonest/honest(A2B1), unknown/known(A2B4), unexpected/expected(B1B2)もある。

#### (1) レベル差のないペア

A1レベルの語同士のペアはない。A2レベルの語のペアは5組(certain | uncertain, necessary | unnecessary, usual | unusual, familiar | unfamiliar, comfortable | uncomfortable)あり、否定語の接頭辞は全てun-である。B1のみのペアは3組(able | unable, fortunate | unfortunate, able | disabled)である。否定語の接頭辞はun-に加え、dis-(disabled)がある。B2のみのペアも3組(willing | unwilling, satisfactory | unsatisfactory, adequate | inadequate)、否定語の接頭辞はun-に加え、in-(inadequate)

も見られる。なお、A レベル内のペアとして、次のような A2A1 のペアが5組ある。important | unimportant, easy | uneasy, happy | unhappy, fair | unfair, healthy | unhealthy

(2) レベル差のあるペア

レベル差のあるペアでは、上記の A2A1 の細分類を除くと、否定語は B レベルである。まず、B1A1 ペアは2組のみ (unlucky | lucky, unwell | well) である。B1・A2 ペアは6組となっている。unclear | clear, unlikely | likely, unfit | fit, indirect | direct, inconvenient | convenient, abnormal | normal である。否定語の接頭辞は un- に加え、in-(indirect, inconvenient) と ab-(abnormal) がある。B2・A1 ペアは3組 (unsure | sure, unsuccessful | successful, indifferent | different) である。B2A2 と B2B1 のペアは多く、それぞれ11組、9組ある (表2)。

表2 B2を含むペア

B2A2 ペア

uncommon	common	unattractive	attractive
unnatural	natural	unacceptable	acceptable
unpopular	popular	unhelpful	helpful
unsafe	safe	unkind	kind
unofficial	official	improbable	probable
unsuitable	suitable		

B2B1 ペア

unavailable	available	unreliable	reliable
unaware	aware	unrealistic	realistic
unlimited	limited	inaccurate	accurate
unreasonable	reasonable	dissatisfied	satisfied
unconscious	conscious		

#### 4.4 単語親密度・頻度を加味したレベル別ペアと接辞項目

単語親密度、BNC 頻度をもとに CFER-J レベル別ペアと接辞項目をまとめた。A1A2 ペアの5組は最も基本的な組み合わせと言えよう。肯定語の親密度順位の範囲は2,965項目の内第66位～第910位、頻度順位の範囲は2～31である。否定語の頻度順位も概ね高い。但し、healthy のペアは、このグループの他の4組に比べるといずれの順位も低い。接頭辞は全て un- である。important の頻度順位は第2位であり、最頻度と言える。否定語では unfair が頻度順位第9位にランクインしており、高順位である。

表3-1 A1A2 ペア

肯定語	否定語	肯定語親密度 順位 (/2965)	肯定語頻度 順位 (/50)	否定語頻度 順位 (/50)
easy	uneasy	66	10	22
happy	unhappy	133	14	10
important	unimportant	695	2	39
fair	unfair	901	20	9
healthy	unhealthy	910	31	47

A2 同士のペアの項目は、上記と比べると親密度が、necessary (66位) を除くと、かなり低くなる。特に familiar (2831)、語義に反して親密度は高くはないようだが、

頻度順位は肯定語も否定語も中程度の順位である。unusual と uncertain の頻度順位が高いが、いずれの語も肯定語の親密度は低い。それらに比して、necessary はいずれの値も高く、同一レベルのペアであるので A2 を目標とする学習者には適切だろう。

表3-2 A2A2ペア

肯定語	否定語	肯定語親密度 順位 (/2965)	肯定語頻度 順位 (/50)	否定語頻度 順位 (/50)
necessary	unnecessary	66	12	11
comfortable	uncomfortable	1,475	32	14
certain	uncertain	2,394	9	8
usual	unusual	2,525	23	4
familiar	unfamiliar	2,831	27	24

次のグループからは A レベルと B レベル語が混在するペアも含まれる。A1B1 のペア2組は lucky/unlucky と well/unwell で、肯定語の lucky (第44位) の親密度は特に高く、日本人学習者には馴染みのある形容詞と言える。日本語の語彙体系に組み込まれた英語借用語の代表例<sup>4)</sup>である。一方で、否定語の unlucky は頻度順位 (第34位) は高くない。unwell は頻度順位が第50位と最も低い。

表3-3 A1B1ペア

肯定語	否定語	肯定語親密度 順位 (/2965)	肯定語頻度 順位 (/50)	否定語頻度 順位 (/50)
lucky	unlucky	44	29	34
well	unwell	418	30	50

A1B2ペアは最もレベルの隔たりが大きなペアである。肯定語の親密度順位は 1081 から 2335 と低順位だが、項目によっては頻度順位が高い語もある。特に、肯定語の clear (第6位), likely (第8位) は顕著である。否定語では likely が特に高頻度である。一方、convenient/inconvenient のペアの頻度順位は共に低い。

表3-4 A1B2ペア

肯定語	否定語	肯定語親密度 順位 (/2965)	肯定語頻度 順位 (/50)	否定語頻度 順位 (/50)
fit	unfit	1,081	36	43
normal	abnormal	1,834	15	23
clear	unclear	1,883	6	21
direct	indirect	2,277	19	12
likely	unlikely	2,335	8	2
convenient	inconvenient	*	45	46

表3-5 A1B2ペア

肯定語	否定語	肯定語親密度 順位 (2965)	肯定語頻度 順位 (/50)	否定語頻度 順位 (/50)
sure	unsure	237	7	31
different	indifferent	311	1	32
successful	unsuccessful	2,806	16	20

A2B2ペアは11組と多い。親密度順位の範囲(160～2673)となっており、頻度順位も肯定語は第11位から第50位、否定語は第15位から第49位とバリエーションが豊富である。

表3-6 A2B2ペア

肯定語	否定語	肯定語親密度 順位 (/2965)	肯定語頻度 順位 (/50)	否定語頻度 順位 (/50)
kind	unkind	160	48	48
natural	unnatural	324	13	36
official	unofficial	749	22	30
safe	unsafe	1188	21	40
common	uncommon	1,523	11	28
attractive	unattractive	1,883	28	45
helpful	unhelpful	2,203	37	49
popular	unpopular	2,491	18	29
acceptable	unacceptable	2,547	34	15
suitable	unsuitable	2,673	26	27
probable	improbable	*	50	42

以降は、肯定語がBレベルのペアである。まず、B1A1、又はB1B1ペアでは最頻度語であるableのペアが2組あり、いずれのペアも頻度順位は非常に高い。

表3-7 B1A1・B1B1ペア

肯定語	否定語	肯定語親密度 順位 (/2965)	肯定語頻度 順位 (/50)	否定語頻度 順位 (/50)
honest	dishonest	1475	41	44
able	unable	791	3	1
able	disabled	791	3	5
fortunate	unfortunate	*	49	13

Bレベルの語彙のみで構成されるグループは、awareを除く全てのペアの否定語が複合接辞(multiple affixation, MA)である。このグループでのMAの構造は3パターンある。1) un + base + able [ous/ate/ic/ed/], 2) in + base + ate, 3) dis + base + ed

表3-8 B1B2ペア

肯定語	否定語	肯定語親密度 順位 (/2965)	肯定語頻度 順位 (/50)	否定語頻度 順位 (/50)
reasonable	unreasonable	583	25	18
conscious	unconscious	1,947	39	17
aware	unaware	2,259	17	16
accurate	inaccurate	2,418	40	37
available	unavailable	2,450	5	41
limited	unlimited	2,563	24	26
reliable	unreliable	2,700	42	35
realistic	unrealistic	*	47	33
satisfied	dissatisfied	*	38	38

最後のグループはB2同士のペアで、5組見られ、親密度の範囲は556～2648と広く、肯定語の頻度順位は第33位から第46位と比較的近い頻度帯にある。否定語の頻度順位の範囲は3～25で、unknown, unexpected, inadequateの3項目は高順位にあ

る。このグループの特徴は3点ある。すわなち、1) 親密度は高順位ではないこと、2) 否定語が高頻度であること、3) 否定語項目の全てが複合接辞である、こと。

表3-9 B2とのペア

肯定語	否定語	肯定語親密度 順位 (2965)	肯定語頻度 順位 (/50)	否定語頻度 順位 (/50)
known	unknown	1,108	46	3
expected	unexpected	556	44	7
adequate	inadequate	2,648	35	6
willing	unwilling	2,440	33	19
satisfactory	unsatisfactory	*	43	25

#### 4.5 ケーススタディ：ペアリングの問題点 (easy/uneasy の場合)

肯定語と反意語の語義とふるまいをBNCで見してみる。語義はWordNet 3.1<sup>5)</sup>を使って意義素と頻度を出力した。また、肯定語及び反意語の基本形、表記形、比較形(含む、迂説形)の出現頻度、文構造はBNCを使って調査した。

##### (1) 語義

語彙の詳細な分類を示す意義素は、easyが12に区分されるのに対してuneasyは半分以下の5区分のみである。両項目とも最も基本的で高頻度とされる意義素は第1義であり、肯定語easyは”posing no difficulty; requiring little effort”である。一方、否定語uneasyは,”lacking a sense of security or affording no ease or reassurance”であり、厳密な意味での反意語関係にはなっていない。それ以降の意義素<sup>6)</sup>についても同様に二者は反意語とは言いがたく、かつ意義素数も大きく異なっていることから、上記の  $W_1(\text{easy}) \Leftrightarrow W_2(\text{uneasy})$  の図式は妥当ではない。

##### (2) BNC 頻度

BNCwebを使ってeasyとuneasyの出現頻度を形式別に出力をし、比較すると、この2項目の大きな違いが明らかになった。まず、表記形による出現頻度を百万語当たりの調整頻度(Per Million Words, PMW)で比べると20倍もの差があり、頻度は全く異なることが分かる。次に、uneasyは比較級(0.16/16)、最上級(0.91/1)で使われることは極めて稀であるが、easyは比較級(59.03/5,803)、最上級(7.84/771)となっている(表4)。

表4 easy/uneasyの頻度

<b>【UNEASY】</b>	<b>【EASY】</b>
基本形: 9.39(923)	基本形: 196.24 (19,293)
表記形別:	表記形別:
uneasy 9.39(923)	easy 146.33 (14,386)
more uneasy 0.16(16)	easier 59.03(5,803)
most uneasy 0.91(1)	easiest 7.84(771)

このことからeasyとuneasyという形容詞の語義と頻度について言えば、この2語は同じ範疇にはない語のペアと言えよう。語義が必ずしも対照関係にはなっていない点、頻度が著しく異なる点から母語話者の言語的直観からすればeasyとuneasyの2

語を反意語として同程度に扱うことには違和感を覚えざるを得ないであろう。

## 5. 考察

本研究では、 $\overline{W_1 \leftrightarrow W_2}$ の図式の問題点を実証的に明らかにするためにBNCデータと単語親密度データを使って、J-Wordlistの形容詞項目における否定接辞付形容詞とそのペアとされる肯定語を比較検証した。また、easy/uneasyについてケーススタディを試みた。これらの結果から明らかなように、肯定語と反意語の意義素の違いや、親密度の差、頻度の違いは $\overline{W_1 \leftrightarrow W_2}$ の式を支持しない。学習者は、既習語やその反意語の差異とそれぞれの頻度差の違いまでは想像せず、訳語を頼りに $\overline{W_1 \leftrightarrow W_2}$ の図式を適用するだろう。語彙レベルの違いも指導上は問題となる。否定を表す接頭辞の種類が多だけに、英語の反意語を作ることは容易ではない(富井 2014) ため、unの付与ルールを過剰一般化して、unhonestやunconvenientのような造語も作ってしまうだろう。「単語を独立して覚えようとするよりも、単語を範疇別にした既知語や音声と関連付けをしたりして学習するほうが、学習した単語の保持率が高まる」(相澤 2014:p153)、「目標語の定着には、受容語彙の定着を目標とするタスクよりも発表語彙の定着を目標とするタスクの方が、受容・発表知識共に定着がよい」(Aizawa et al.2003)、とも言われる。

そこで、本研究の結果を踏まえて、学年別の否定接辞付形容詞の発信語彙習得のためのペアリングの学習指導プラン49組を提案する(表5)。本プランは、発表語彙の定着を目標とするタスクのために語彙シラバスの具体的な資料として理解する。選択基準は、CEFR-Jレベル、単語親密度、BNC出現頻度の順で重要度を決めている。手順は、形容詞のペアを決め、CEFR-Jのレベル付け、親密度の値の付与、頻度により調整、とした。指導の基本的な考え方は、ペアの内より上位の項目のレベルに合わせてレベル下位語も同時に発表語彙として扱うということである。例えば、A1A2とA2A2のペアはA2の段階、中学終了前から高校1年生の指導項目とする。A2B1とB1B1ペアはB1の段階、高校1年から高校2年生の指導項目とする。タスクのイメージとしては、語義が反対になっている語(例 healthy-unhealthy)であれば反意文を言わせる活動が可能である。

但し、Nation (2001) の分類における、意味中心と形式中心の反意語の区分を取り入れるとすると、同一レベル内の否定接辞の付かない意味的反意語(例 happy/unhappy/sad)も指導対象とすべきだろう。また、A2B2ペアのようなレベル差が大きい項目の場合は指導項目とすべきではない。

表5 レベル・単語親密度・頻度を踏まえた学習指導学年別否定接辞付形容詞ペアの(案)

	<u>A1</u>	<u>A2</u>	<u>B1</u>	<u>B2</u>
中学3年 11組	easy <b>happy</b> important fair healthy	uneasy unhappy <b>unimportant</b> unfair <b>unhealthy</b>		
		<b>necessary</b> /unnecessary comfortable/uncomfortable honest/ <b>dishonest</b> certain/uncertain usual/unusual familiar/unfamiliar		
高校1年 10組	<b>lucky</b> <b>well</b>		unlucky <b>unwell</b>	
		fit normal clear direct likely convenient	<b>unfit</b> abnormal unclear indirect unlikely <b>inconvenient</b>	
高校2年 15組			able/unable/disabled fortunate/ unfortunate	
	sure <b>different</b> successful			unsure indifferent unsuccessful
		<b>kind</b> <b>natural</b> official common <b>unknown</b> attractive helpful popular safe suitable acceptable probable		unkind <b>unnatural</b> unofficial uncommon known <b>unattractive</b> <b>unhelpful</b> <b>unpopular</b> unsafe unsuitable unacceptable <b>improbable</b>
高校3年 13組			unexpected reasonable aware conscious accurate available limited reliable realistic satisfied	<b>expected</b> unreasonable unaware unconscious <b>inaccurate</b> <b>unavailable</b> unlimited <b>unreliable</b> <b>unrealistic</b> <b>dissatisfied</b>
				adequate/inadequate willing/unwilling satisfactory/unsatisfactory

本研究の限界は、BNCの検証がコーパス全体を対象としていることによる学習対象者との関係の妥当性の問題があろう。また、親密度についてはデータを活用したものの学習者の接辞の使用実態については検証していない。 $W_1 \leftrightarrow W_2$ という過剰に単純化・一般化した図式の語彙指導の延長上に発信語彙の習得があるのか再考するには効果検証が不可欠である。今後は、意図的語彙指導のひとつとして接辞項目リスト等による明示的な接辞の指導や発信目的をするタスクによる接辞の指導等の教室内実験や学習者コーパスにおける使用実態等の横断的・縦断的な検証を進めたい。さらに、意味中心の反意語の指導を想定した肯定語と否定語のペアについても検証する必要がある。

## 注

- 1) -able, -ac, -al, -ant, -ary, -ate, -based, -bound, -centric, -ed, -ent, -esque, -fold, -free, -ful, -headed, -ic, -ile, -ine, -ing, -ish, -ive, -less, -like, -ly, -made, -minded, -most, -ory, -ous, -proof, -some, -tic, -wide, -worthy, -y(xvi) なお、この内、否定接尾辞は -less のみである。
- 2) ここで現代英語とは、1960年から1993年までに、1) 出版あるいは、記録された文書、あるいは、2) 発話され、書き起こされたテキストの集合体である。前者には、新聞、専門雑誌、学術書、大衆小説、手紙やメモ)、大学の学内印刷物等の、種々のテキストが含まれる。文書のバランスは統計値をもとに決められており、均衡コーパスとなっている。後者は、日常会話が収録されており、これは、人口統計学上のバランスに基づいて、さまざまな年代、地域の英語話者が実際に話した発話データが収録されている。また、ビジネス場面や政府機関の会議、ラジオのトークショー等、あらゆる状況における話し言葉で構成されている。
- 3) なお、CD-ROMには「英単語親密度調査(文字編)」のデータも収録されているが、本研究では、音声編のデータのみを使用し、単語項目と親密度順位を調査する。
- 4) なお、現代英語における構成(Plag 2003)とは異なる部分もあるが、un- が半分以上を占めている点や順位は基本的に一致している。
- 5) 例えば、lucky(ラッキー)、happy(ハッピー)、normal(ノーマル)
- 6) Princeton University(2010). "About WordNet." WordNet. <http://wordnet.princeton.edu>
- 7) 上記5) WordNetにより作成

EASY (CEFR-J A1レベル)	UNEASY (CEFR-J A2レベル)
1. posing no difficulty; requiring little effort	1. lacking a sense of security or affording no ease or reassurance
2. easygoing, leisurely (not hurried or forced)	2. restless, lacking or not affording physical or mental rest
3. free from worry or anxiety	3. anxious, nervous, queasy, unquiet (causing or fraught with or showing anxiety)
4. affording pleasure	4. awkward, ill at ease, socially uncomfortable; unsure and constrained in manner
5. gentle, soft (having little impact)	5. relating to bodily unease that causes discomfort
6. readily exploited or tricked)	
7. comfortable, prosperous, well-fixed, well-heeled, well-off, well-situated, well-to-do (in fortunate circumstances financially; moderately rich)	
8. gentle (marked by moderate steepness)	
9. affording comfort	
10. light, loose, promiscuous, sluttish, wanton (casual and unrestrained in sexual behavior)	
11. less in demand and therefore readily obtainable	
12. obtained with little effort or sacrifice, often obtained illegally	

## 参考文献

- Aizawa, K., Nakayama, N., & Osaki, S. (2003). The effects of teaching on vocabulary knowledge: Receptive vs. productive. *ARELE*, 14, 151-160.
- 相澤一美 (2014). 英語教育学の今—理論と実践の統合—・全国英語教育学会第40回研大会記念特別誌編集委員会編『全国英語教育学会第40回研究大会記念特別誌』.
- Danilović, J. Dimitrijević Savić, J. Dimitrijević, M. (2013). Affix Acquisition Order in Serbian EFL Learners. *Romanian Journal of English Studies*, 10(1).
- ガイ・アシュトン・ルー・バーナード著 (北村裕監訳)(2003).『British National Corpus The BNC Handnook コーパス言語学への誘い』 東京:松柏社.
- 堀田誠・平野絹江 (2014).「日本人学習者の語彙学習方略」, 全国英語教育学会第40回研究大会記念特別誌編集委員会編『全国英語教育学会第40回研究大会記念特別誌』.
- Leech, G. Rayson, P., Wilson, A. (2001). *Companion Website for Word Frequencies in Written and Spoken English: based on the British National Corpus*. <http://ucrel.lancs.ac.uk/bncfreq/>
- López Jiménez, M. D. (2010). The treatment of lexical aspects in commercial textbooks for L2 teaching and learning, In R. Chacon-beltran et al. (Eds). *Insights into Non-native Vocabulary Teaching and Learning*. UK: Multilingual Matters.
- Mochizuki, M. & Aizawa, K.(2000). An affix acquisition order for EFL learners: An exploratory study, *System* 28(2):291-304.
- 望月正道・相澤一美・投野由紀夫 (2003).『英語語彙の指導マニュアル』 東京:大修館.
- Nation, I.S.P. (2001). *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nation, I.S.P. (2008). *Teaching Vocabulary: Strategies and Techniques*. MA: Heinle, Cengage Learning.
- 西川守雄 (2006).『英語接辞研究』東京:開拓社.
- 西川守雄 (2013).『英語接辞の魅力 語彙力を高める単語のメカニズム』東京:開拓社.
- 西山正秋 (2006).「3.4 語形成と語源の知識を活用して語彙指導をしたい」東京:大修館:(門田修平・池村大一郎編著. 英語語彙指導ハンドブック)78-83.
- Plag, I.(2003). *Word-Formation in English*, UK:CUP 30-40.
- Princeton University (2010). Princeton University "About WordNet." WordNet. <http://wordnet.princeton.edu>
- Schmitt, N. & Meara, P. (1997). Researching vocabulary through a word knowledge framework: Word associations and verbal suffixes, *Studies in Second Language Acquisition* 19(01) , 17-36.
- Schmitt, N. (2010). Key issues in teaching and learning vocabulary In R. Chacon-beltran et al.
- Stahl, S. A. & Nagy W. E. (2006). *Teaching Word Meanings*. NJ:Lawrence Erlbaum Associates.
- 富井篤編 (2014).『英語反意語辞典』 東京:三省堂.
- 投野由紀夫 (編)(2013).『CAN-DOリスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-Jガイドブック』東京大修館書店.
- 内田富男 (2014a).「高校生はCEFR Level-Aの形容詞をどのように使うのか」. 関東甲信越英語教育学会千葉研究大会 8月 明海大学.
- 内田富男 (2014b).「日本人中高生の形容詞語彙のレバトリーとJ-Wordlistの比較」8月 徳島大学『全国英語教育学会徳島研究大会予稿集』.
- 内田富男 (2016).「happyの反対はunhappy」と教えてはいけぬ8つの理由—発信語彙・コロケーション指導への示唆—,2016年8月 獨協大学『全国英語教育学会埼玉研究大会予稿集』.
- 横川博一編著 (2009).『日本人英語学習者の英単語親密度 音声編』 東京:くろしお出版.